第二章　気　候

概　況

この地方は、概ね表日本式気候で夏の時期に雨が多くて、冬の時期は極端に乾燥する日が多い。気温は比較的温暖であり、適当な降雨量にも恵まれ一般的には暮しやすい日が多い地域といえよう。

今日では気象についてテレビ、ラジオ、新聞などで詳細に日々の予報がだされ、人々は日常生活の中で大いに利用しているが、本町の位置が概ね西・北・東方が山にかこまれ、南方は海につづく平地であるので表日本の典型的な気候を示し、また天気が西から東へしだいに移動するため、西北にあたる岐阜地方の気象に注意をむける人が多い。

表1－4
天気類別日数（県統計資料より作成）

区分 / 年度	快晴	曇	雨	雪
昭和21年	59日	149日	153日	18日
25	50	149	154	9
30	69	160	138	14
35	68	142	133	13
40	74	129	149	24
45	51	165	128	29
50	61	152	114	22

（注）
- 平均雲量が2.5未満の日は快晴日とする。
- 平均雲量が7.5以上の日は曇日とする。
- 雨天は降水量が0.1mm以上あった日。

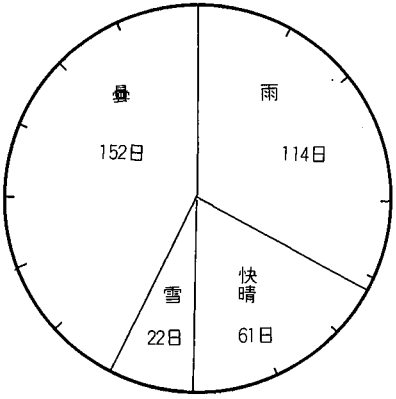
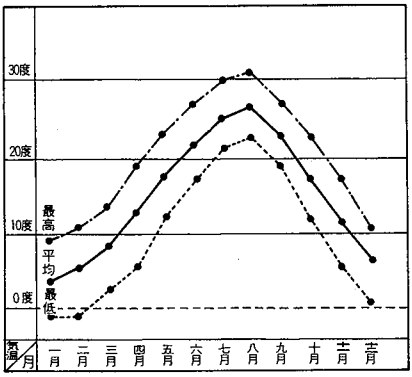


図1－13　晴・曇・雨（昭和50年調べ）

第一節　気　温

大口町は、濃尾平野の北部に位置している。当地方の気象は江南市の旧布袋町にあった愛知県蚕業試験所内気象観測所、（昭和四四、三機構改革のため廃止）の記録によるとつぎのとおりである。

気温は、昭和二六年から昭和三五年の十か年の、平均最高気温は二〇度、最低は九・九度、平均一五度といったいわばしのぎよい気温である。海岸に近い名古屋市の気温が平均最高気温二〇・四度、最低一〇・七度、平均一五・六度でこれに比較すると、山間部により近い大口町は、名古屋市より幾分低めの気温を持つ地域であるといえる。表が示すように、いずれの月の平均気温も、最高と最低の差が十度前後の平行線をたどっており、おだやかな日々が続いているといえる。



布袋に於ける10か年の最高・最低・平均気温図
自昭和26年至昭和35年　―名古屋中央気象台―

図1―14　気　　温

表1―5　気温自昭和36年 至昭和45年の平均値

（単位：℃）

月別	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
最高	8.1	9.2	12.8	19.3	24.1	26.7	30.5	32.2	27.7	22.1	16.9	11.0
最低	−2.2	−1.9	0.9	8.1	12.7	17.3	22.5	23.0	18.6	11.1	5.2	0.2
平均	2.8	3.5	6.8	13.6	18.4	21.8	26.0	27.1	22.8	16.3	10.8	5.4

表1－6　天気現象日数

観測所　名古屋中央気象台
自 昭和26年　至 昭和35年、10か年の月別累計と平均日数

種別／月別	雨	雪	ひょう	あられ	霧	濃煙霧	雷電	霜	霜柱	結氷	快晴	曇天	地震
1月	118	69		8	16	10		196	89	202	119	134	
2月	98	50		7	9	14		134	55	158	111	129	
3月	138	16		3	14	4	2	76	9	73	93	171	
4月	154		1	1	16	5	6	11		4	94	164	
5月	156			1	5	2	9				74	129	
6月	189				17	4	12				33	230	
7月	190						42				33	220	
8月	148				6	3	38				68	174	
9月	190				20	2	22				56	199	
10月	143				14	2	5				88	174	
11月	119	1			18	2	3	24		6	139	118	
12月	130	17		3	23	16	1	143	6	100	125	126	
合計	1,773	153	1	23	167	68	140	584	154	543	1,033	203	0
平均	177	15	0.1	2	17	7	14	58	15	54	103	203	0

第二節　風

この地域では、三、四月ごろから南風がしだいに吹きはじめ一段と春らしくなってくる。

一年を通して四月から一〇月までは、おおむね西風が多く、一一月から翌年三月までは北西の風が多い。

この中で一、二月の伊吹おろしの吹きつける時期は寒さが厳しく降雪の日もあり、時には二、三〇センチメートルに及ぶこともあったが近年は非常に少ない。また水道(蛇口)が凍って水の出ない朝も数回はある。

二、三月は晴天の日が多く、空気も乾燥して耕土の砂質壌土が西風に吹き上げられ、砂塵がもうもうと立ちこめるのもこの季節である。

伊吹おろしは、関ヶ原地方の西側の低い谷間をこえて、この地方に吹きこむ北西の空風をいい、非常につめたく湿度が低い。昔は町内でこの季節風を利用して、〝大根切干〟(千切りぼし)

をつくる農家が多く、冬期のこの地方の風物誌としてこの風景は親しまれてもきたが、今日ではあまり見ることが出来ない。

降霜は比較的少ないが、この地方の産業の中心でもあった養蚕家にとって春蚕期の晩霜は大きな痛手であり、大正八年四月二八日の大霜害は典型的な霜害として、記録されその折の苦労は今日も語りつがれている。

第三節　降　水　量

表1－7　降　雨　量(昭和50年度)

(単位：ミリメートル)

月別	1月	2月	3月	4月	5月	6月
降雨量	69	74	113	168	140	212
月別	7月	8月	9月	10月	11月	12月
降雨量	284	229	134	264	161	49

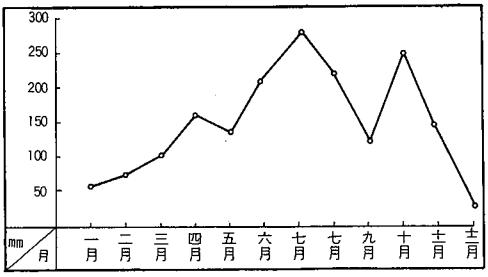


図1－15　降　雨　量(昭和50年度)

表に示すように、大口町では温暖な気温と適当な雨量があって、農業には恵まれた地域であり、とりわけ水田が多く梅雨期は、六月中旬から七月中・下旬の約三〇日間で、降水量も年間の1/3程度となり、田植には好都合となっている。

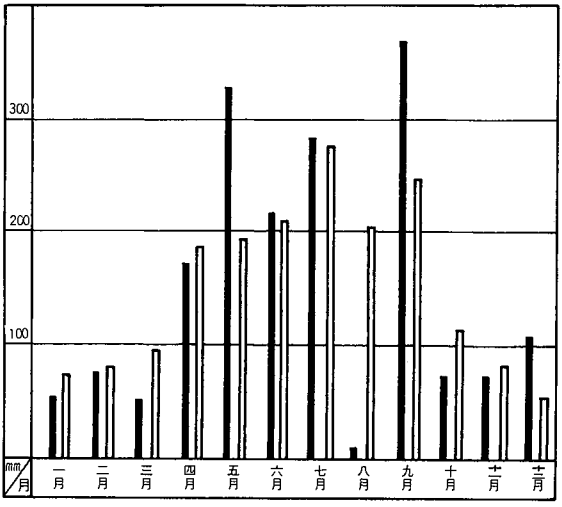
本町における年間の降雨量は、一、五〇〇ミリ前後と記録されているが昭和五〇年度における降雨量は、平年に比べ多く約一、八九〇ミリが記録され、月別では上表のようである。

つぎの表1－8・図1－16は、それぞれ布袋観測所・名古屋中央気象台発表によるもので、降水・降雨量とも本町においてもほぼ同じとみてよい。

表1－8　降　水　量

自 昭和26年　至 昭和35年の累計と平均
昭和36年以降は布袋観測所が廃止になるまでの記録　（観測所　布袋）

月別 / 年度	一月	二月	三月	四月	五月	六月	七月	八月	九月	一〇月	一一月	一二月	合計
自昭和26年 至昭和35年 累計	677	757	991	1,840	1,898	2,098	2,761	2,020	2,414	1,107	812	569	17,944
10ヶ年の累計 平　均	68	76	99	184	190	210	276	202	241	111	81	57	1,795
昭和36年	65	30	88	189	126	725	159	72	290	174	89	32	2,047
昭和37年	35	12	32	201	212	317	158	113	35	213	41	32	1,501
昭和38年	39	40	95	161	278	255	193	160	121	82	41	25	1,490
昭和39年	81	75	100	176	40	229	209	64	186	98	46	43	1,347
昭和40年	46	70	46	169	321	212	280	4	362	66	70	103	1,748
昭和41年	54	112	221	98	182	184	182	159	275	106	43	29	1,645
昭和42年	63	21	133	263	106	228	339	119	113	195	70	36	1,686
昭和43年	47	83	127	141	162	170	243	208	145	111	51	124	1,612



□は昭和20年から昭和35年まで、10か年の平均月別降雨量を表わしたものである。
■は昭和40年の降雨量。

図1－16　降　雨　量

第三章　水資源

第一節　木曽川

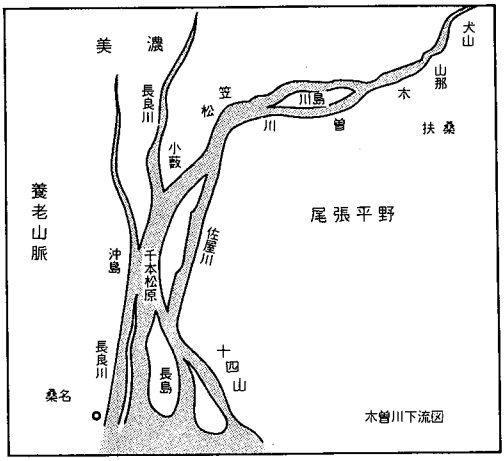


図1—17　木曽三川水系図
「木曽三川の沿水史を語る」に依る

木曽川

木曽川は、長野、岐阜県境、北アルプスの最南端に位する御岳の山麓に発し、木曽山脈と飛騨山脈の間を南西に流れ、寝覚の床、賤母峡谷、恵那峡、蘇水峡などの美しい峡谷で知られる木曽谷をつくり、川はさらに南西に流れ、日本ラインとなり、犬山で濃尾平野に出て、犬山扇状地を形成し、愛知・岐阜の県境を流れ、笠松付近から南に曲がり、長良川、揖斐川とほとんど同一地点に集まって伊勢湾に注いでいる。流域面積四、九五六平方キロメートル、流路延長二一五キロメートル（基準点・笠松）、支流の数は二二三にもおよぶわが国有数の大河である。

現在、中部経済圏の中心として、繁栄している濃尾平野は、この木曽川および長良・揖斐のいわゆる木曽三川の水エネルギーで